

もくじ

展示紹介

FUJISAWA LEGACY ENOSHIMA UKIYO-E

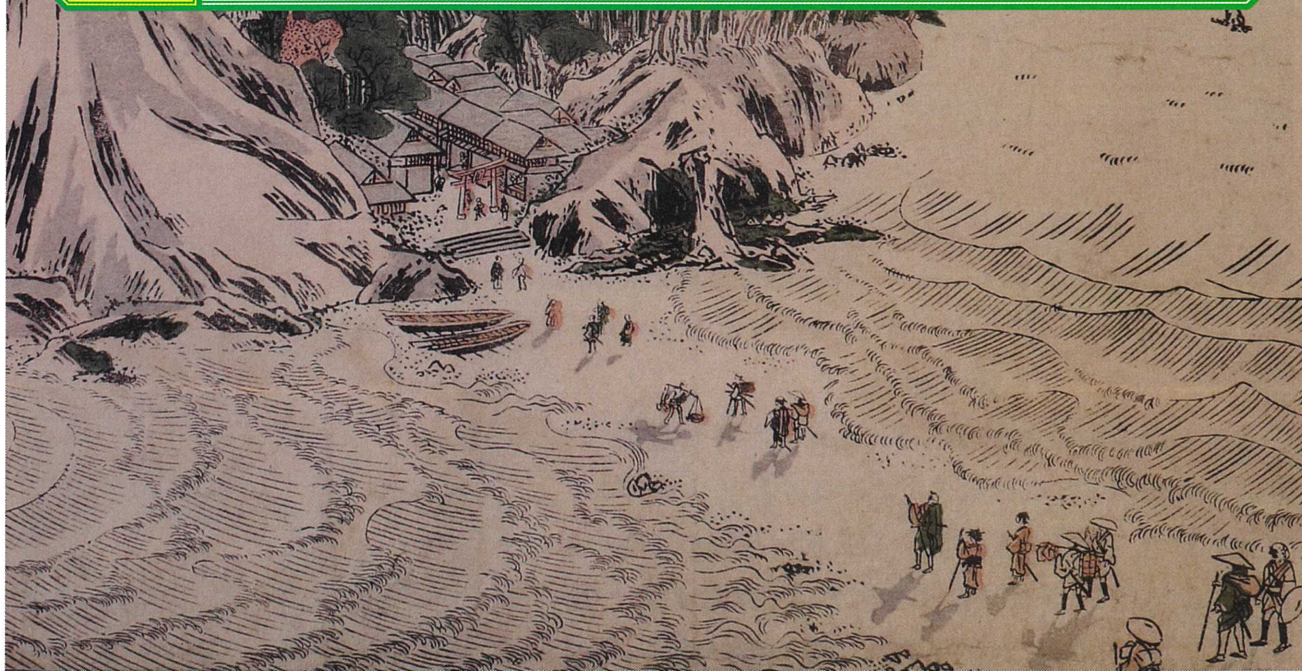
- 「江の島浮世絵と富士山 伝説の宝庫 ～藤沢・江の島～」…………… P1
「藤沢と源義経」…………… P2
浮世絵こぼれ話17 広重が描いた江の島と富士山…………… P3
二代目オニカゲ学芸員のページ⑩正面摺りの魅力/浮世場なれ/編集後記…………… P4

FUJISAWA LEGACY ENOSHIMA UKIYO-E

江の島浮世絵と富士山 伝説の宝庫 ～藤沢・江の島～

会期

2023年7月11日(火)～9月3日(日)



勝川春章「相州江之島ノ風景腰越ノ方ヨリ見図」(部分)

本展示では、浮世絵と郷土資料により、藤沢市と江の島にまつわる伝説を紹介します。

藤沢は、江戸からも近郊であり、東海道の宿場としてだけでなく、江の島詣や、大山詣りの参詣路が交わる分岐点として、多くの文化的往来がありました。そのため、藤沢にまつわる様々な出来事や歴史、風物などが、歌舞伎や謡曲、狂歌、版本などの江戸時代に発展した庶民文化の中に多く取り入れられました。藤沢には、古くは江の島の誕生伝説、弁財天信仰の成り立ち、富士山と江の島が人穴(洞窟)でつながっている伝説など、今でも私たちを楽しませてくれる伝説が多くあります。また、奥州の地で討ち取られた源義経の首が藤沢にたどり着く伝説も、江戸時代にはすでに藤沢宿を彩る伝説の一つでした。

江の島とともに描かれる富士山の浮世絵、義経を描いた現代漫画と浮世絵のコラボレーション展示もご覧いただき、さまざまな伝説にあふれる藤沢の郷土歴史をお楽しみください。

藤沢と源義経

文治5年(1189) 閏4月30日、源義経は衣川館で藤原泰衡の軍勢に襲われ、妻子とともに自害しました。享年31歳でした。義経の首はその後酒漬けにされ、泰衡の郎党により鎌倉へ運ばれました。鎌倉へ運ばれた義経の首ですが、鎌倉の中へ運ばれることなく腰越の浜で侍所の別当である和田義盛と同所司の梶原景時によって実検が行われています。鎌倉幕府の記録である『吾妻鏡』には、変わり果てた義経の首を見た人々は皆涙を流したとあります。

その後義経の首がどのようになったか『吾妻鏡』には記されていません。



【図1】歌川国貞(三代豊国)
「東海道五十三次之内 藤枝 源義経」



【図2】歌川芳艶「大物浦義経渡海図」

義経の首に関連する記録が次に登場するのが室町時代に成立した『鎌倉大日記』です。同書には「閏四月三十日 義経於衣川館自害 五月十三日 首上鎌倉被埋藤沢」とあり、義経の首は藤沢に葬られたと記されています。

ただし義経の死去から数百年後に書かれた記事であり、その真偽は定かではありません。

藤沢市内で義経の首に関する伝承が確認できるのは文政13年(1830)に*小川泰堂によって書かれた『我棲里』です。同書には「その頃、藤沢の川辺に、金色なる亀、泥に染みたる首を甲に負い出たり。里人驚きて怪しみたるほどに、側にありける童子たちまち狂気のごとく肘をはり、『我は源義経なり、薄命にして讒者の毒舌にかかり、身は奥州高館の露と消えるのみならず、首さえ捨てられ怨魂やるかたなし、汝等よきに弔いてくれよ』と言い終わりにて倒れぬ。諸人恐れて、これを塚となせり」とあります。

『我棲里』の記事を見ると、少なくとも江戸時代の終わり頃には藤沢宿周辺では義経の首に関する伝承が成立していたことがわかります。首塚は失われてしまいましたが、現在でも首洗い井戸は地域の人々によって大切に保存されています。

* 江戸時代に藤沢宿で医業を営んでいた著述家



藤沢市に残る「義経の首洗い井戸」

広重が描いた江の島と富士山

歌川広重は「東海道五拾三次之内」、「名所江戸百景」など多くの名所絵を残しました。今回紹介する「富士三十六景」は富士山を主題とした浮世絵の揃物そろいもの（シリーズ）として広重の没後（安政5年【1858】9月6日没）に出版されました。同じく揃物として富士山を描いた葛飾北斎の「富嶽三十六景」（文政末期～天保初期【1830-45】刊行）が有名ですが、広重の作品には独自の構成がみられ、北斎とは異なる風景を描いています。



【図1】歌川広重 「富士三十六景 相模江之島入口」

今回は、広重と北斎のシリーズの中から相模の風景を描いた同じテーマの作品を比較し、広重が描いた江の島と富士山を紹介します。江戸近郊ふこうめいびにあり風光明媚な景勝地である江の島は、多くの参詣客けいきやくで賑わい、江戸時代を通じて浮世絵の題材となりました。

図1の広重の「富士三十六景 相模江之島入口」では鳥居の向こうに富士山が見えますが、現実の位置では鳥居は片瀬方面（北側）を向いており、富士山を見ることはできません。

浮世絵師は時に画面構成を優先し、伝えるべき情報を絵画化するために実際の地形とは異なる風景を描きました。おそらく「江の島と富士山」というセットとしての情報を優先したため、鳥居越しに見える富士山という劇的な構図を描いたのではないかと考えられます。この絵に描かれている鳥居は文政4年（1821）に建立されたもので「青銅鳥居」として親しまれ、今も同所に建っています。

それに対して図2は同じ江の島と富士山を描いた北斎の「富嶽三十六景 相州江の島」です。この図は片瀬方面から江の島を眺めており、個性のある表現をする北斎としては比較的現実に近い描写といえます。

広重の「富士三十六景」は北斎の「富嶽三十六景」からヒントを得たとも言われています。ここにはもしかすると北斎へのライバル心、あるいは「北斎とは違う絵を描く」という私たちには計り知れぬ思いから図1のような構図を描いたのかもしれませんが。ちなみに、広重は相模を旅したと言われており、実際の江の島と富士山の位置関係は認識していたものと思われる。



【図2】葛飾北斎 「富嶽三十六景 相州江の島」



正面摺りの魅力

浮世絵の多くは、作品を守るため額やケースの中に展示されています。しかし、浮世絵の摺りの技術は、そのような状態ではどうしても見えにくくなってしまいます。今回は、お見せしにくい浮世絵の摺りの技術の一つ、正面摺りを紹介します。

正面摺りとは紙面上につやを出す技法です。絵具を使わない摺りで、主に衣服の模様などを施すことに用いられます。木版画である浮世絵は通常、絵具をぬった版木に紙を当てて、裏面をバレンで摺り、絵具を紙に摺りとり。一方、正面摺りは絵具を使わずに、模様などを彫った版木に紙をのせて、絵の表面をお猪口などの陶器でこすることで紙を押しつぶして、表面につやを出します。

正面摺りが施された浮世絵は正面から見ると無地に見えますが（図1）、角度を変えてななめから見ると…



【図1】歌川国貞（三代豊国）「東海道五十三次之内 二川 石川友市」

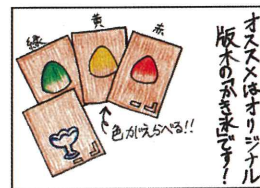
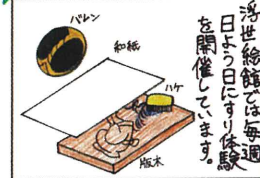


【図2】歌川国貞（三代豊国）「東海道五十三次之内 二川 石川友市」

つやのある模様（図2）が浮かび上がります。落ち着いた雰囲気の商品かと思えば、実はとっても華やか！このように正面摺りが施された作品は鑑賞する角度の違いで、がらりと作品の印象が変わることが魅力です。正面摺りと言いながら、ななめに見ると模様が見えてくることも面白いポイントです。

額装された作品を正面から鑑賞することを前提とした展示室では、正面摺りは特に見えにくい摺りの技術ですが、じっくりと鑑賞すると見ることが出来ます。オニカゲ学芸員おすすめの鑑賞方法は見る角度を変えることです（まわりの鑑賞者の迷惑にならないように気を付けてくださいね）。ちらっと見ただけでは気付けない正面摺りを見つけると、浮世絵がより魅力的に見えて、ちょっと得をした気分になります。

今回は正面摺りをクローズアップしましたが、浮世絵にはほかにも様々な摺りの技術があります。ぜひ、じっくりと浮世絵を鑑賞して、魅力的な摺りの技術を探してみてください。



編集後記

多彩な歴史文化や話題を取り入れながら発達した江戸文化は、日本全国の地域にある伝説、説話、風物などを盛んに取り入れ、融合と変化を繰り返しながら、人々を楽しませていました。藤沢にも、江戸文化の形成に関わり、影響を与えた興味深い伝説や地域文化があることを、この展示を通じて知っていただければ幸いです。

編集・発行：藤沢市藤澤浮世絵館

【住所】〒251-0041 神奈川県藤沢市辻堂神台2丁目2番2号ココテラス湘南7階

【電話】0466-33-0111 【FAX】0466-30-1817

【開館時間】10:00~19:00（入館は18:30まで）

【休館日】月曜日（祝日、振替休日の場合は翌平日）

※その他、展示替えのために休館日がございます

【HP】[藤沢市藤澤浮世絵館](#) で検索 🔍

